

「立ち上がり、歩きなさい」

2016年02月25日

使徒言行録3章1節～10節。ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。その男が、何かもらえると思って二人を見つめていると、ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。

ペトロとヨハネがユダヤ教で定められた午後3時の祈りの時間に、祈るためにエルサレム神殿に上って行った。すると、生まれながら足の不自由な男が「美しい門」という神殿の門の傍に置いてもらうために運ばれて来た。足の不自由な彼は、神殿に祈りに来る人々の施しにすがって生きるしかなかった。彼はペトロとヨハネが境内に入るのを見て、いつものように施しを乞うた。バングラデシュに行った時、イスラム教のモスクの階段の下で、目の見えない老人が筵の上に座り「アッラー、アッラー」と声を張り上げ、施しを乞うていた姿が思い出される。ペトロとヨハネは彼をじっと見た。施しをする時、相手をじっと見ることはない。さりげなく、小銭を皿に投げ入れるだけである。じっと見られた彼は大金を施してもらえると期待しただろう。ところが、ペトロは「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と宣言した。そして、右手を取って起こすと、足やくるぶしがしっかりして、男は躍り上がって立ち、歩き出した。彼は歩き、踊り、神を賛美しながら、ペトロとヨハネの後について境内に入って行った。民衆は、毎日「美しい門」の傍に座って施しを乞うていた男が立ち上がり、歩き、神を賛美している奇跡を見て、我を忘れるほど驚いた。

この奇跡を読む度に、中森幾之進牧師のことを思い出す。中森牧師は東京の山谷の「玉姫館」というアパートの3畳間で開拓伝道をしておられた。先生は年賀状をくださったが、毎年必ず「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と書かれていた。先生の山谷の住人へのメッセージであったのだろう。

このメッセージは私へのものであった。私は高校生の頃、生きる意味や方向性を見出せず、自分をダメだと思う暗闇の中に沈み込んでいた。兄から「お前は何を考えているのか。これから、どうしたいのだ」と叱られた。私は教会に行き、初めて聖書を読み、主イエスを知った。主イエスは私を丸ごと受け止め「よし」と宣言し「生きよ」と言ってくださる。その声を聞いて、この方にすがって生きようと、立ち上がった。私は主イエスの名によって、牧師の端に加えられる人生を与えられた。足の不自由な男が立ち上がって、歩いた奇跡は昔に起こった不思議ではなく、私の身に起きた出来事であった。